

主 題：忠実な同労者がもたらす励まし③

聖書箇所：コロサイ人への手紙 4章12-14節

テーマ：パウロの働きを支えた同労者たちはどのような人物だったか？

きょう私たちはコロサイ4：12-14を中心に考えたいと思います。まずは7節から読みますので、これまで学んできたことを思い返しながらか、よく神様のことばに耳を傾けてみてください。

コロサイ4：7-14

「7 私の様子については、主にあつて愛する兄弟、忠実な奉仕者、同労のしもべであるテキコが、あなたがたの一部始終を知らせるでしょう。8 私がテキコをあなたがたのもとに送るのは、あなたがたが私たちの様子を知り、彼によって心に励ましを受けるためにほかなりません。9 また彼は、あなたがたの仲間のひとり、忠実な愛する兄弟オネシモといっしょに行きます。このふたりが、こちらの様子をみな知らせてくれるでしょう。10 私といっしょに囚人となっているアリストルコが、あなたがたによろしくと言っています。パルナバのいとこであるマルコも同じです——この人については、もし彼があなたがたのところに行つたなら、歓迎するようにという指示をあなたがたは受けています。——11 ユストと呼ばれるイエスもよろしくと言っています。割礼を受けた人では、この人たちだけが、神の国のために働く私の同労者です。また、彼らは私を激励する者となってくれました。12 あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパフラスが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。13 私はあかしします。彼はあなたがたのために、またラオデキヤとヒエラポリスにいる人々のために、非常に苦勞しています。14 愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています。」

さて、思い返していただくと、私たちはここ二週にわたつて、パウロの働きを影で支えていた8人の働き人、同労者たちについて、コロサイ4：7から順に考えてきました。すでに5人の人物について見てきましたが、それぞれどんな存在だったか覚えているでしょうか？ひとり目に私たちが見たのはテキコでした。テキコはどんな犠牲をも喜んで払おうとした人物でした。いつでもだれかのために働いて、ほかの人の抱えている必要を満たそうといつも準備もできていた、神様と人にと仕える者でした。ふたり目に見たのはオネシモでした。オネシモは確かに救われる前、大きな罪を犯した者でした。しかし、それでも神様の恵みによって救われ、新しく造り変えられた彼は、働きのために役に立つ者となった人物でした。3人目に見たのはアリストルコでした。アリストルコは自分にとって都合の良い簡単な時だけではなく、彼はたとえ困難や大変さが伴う時でさえ神様を愛して、そして同じ神様を愛する兄弟たちに喜んで仕えようとした人物でした。4人目に見たのはマルコでした。マルコはオネシモとは違って、救われた後に大きな失敗を犯した者でした。パウロを傷つけて、かつてはただ不誠実な者でしかありませんでした。しかし、それでも恵みによって成長した彼は、主の働きのために役に立つ者へと変えられた人物でした。そして5人目に見たのはユストと呼ばれるイエスでした。ユストは聖書の中にはほとんど登場してこない、まさにだれにも知られていないような影の働き人でした。しかし、そのように人の目に留まらなかったとしても、パウロのそばから離れることをせず、その働きを忠実に支え続けた者だったのです。以前私たちは、これらのひとりひとりについて知らなかったかもしれません。有名な人物ではありません。表舞台に常に登場してくるような物語の主人公でもありません。しかし、そんな一見普通に思えるような者たちの存在が、パウロにとっての心の励ましとなっていました。

そして改めて考えてみてください。皆さん、あれだけみことばの知識と知恵に富んでいた、神様といつともに歩んでいたそのパウロでさえ、たったひとりですべての働きをなそうとはしていなかったということです。あのパウロでさえ、たったひとりで信仰生活を送っていたのではありませんでした。彼にも重荷を分かち合うことのできる友が必要でした。彼にも祈り、支え合うことのできる神の家族が必要でした。彼にも同じように主を心から愛する忠実な同労者が欠かせなかったのです。パウロに必要ななら、今の私たちにも必要であることは言うまでもありません。私たちにも信仰の友が、私たちにもともに働く者たちが決して欠かせません。今まで見てきたようなパウロを支えていた同労者たちのように、何よりも私たち自身が神様と人とを愛する者としてますます成長していく責任を負っているのです。ですから、続けて一緒にみことばを見てみましょう。特にきょうは最後、触れていない残り3人のパウロの同労者の姿を考えてみたいと思います。そしてこの3人の姿を見ながら、今の私たちになんかことが教えられているのか、彼らの姿からいったい私たちは何を学べうことができるのか、そのことをよく考えてみましょう。

○パウロの忠実な同労者たち：

6. エパfras 12-13節

では早速、6人目の同労者の姿から見てみましょう。パウロとともに仕えた6人目の人物、それは、エパfrasでした。このように12節は始まっています。「あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。…」と。さて皆さん、このエパfrasはどんな人物だったのでしょうか？この人物もあまり聖書には出てきません。でもこの人物を理解する上で、注目することができることばがここに二つ出てきていました。エパfrasがだれなのかを理解するために、鍵となる二つの表現をパウロはここに用いていたのです。

▶「あなたがたの仲間のひとり」

一つ目に、エパfrasはパウロに何と言われていました？「あなたがたの仲間のひとり、」でした。これを読んで気づいた方がいるかもしれません。このことばは、9節で見たオネシモに対しても用いられていたものでした。エパfrasもオネシモと同じです。もともとはコロサイ出身のひとりの信仰者だったというわけです。またそれ以上に、エパfrasはコロサイの教会の人たちにとって大切な仲間、群の一員でもありました。コロサイの教会はエパfrasのことをほかのだれよりもよく知っていたのです。

それもそのはず、このコロサイの教会を始めた人物こそ、まさにエパfrasでした。ずいぶん前なので忘れてしまっているかもしれませんが、以前一緒に見たコロサイ1：6-7にこんなことばが記されています。抜粋して読みますが、こんなふうに書いていました。「：6…福音はそのようにしてあなた方に届いたのです。：7これはあなた方が私たちと同じしもべである愛するエパfrasから学んだとおりのもので

…」と。聞きました？言われていたとおり、コロサイの教会に最初に福音を届けたのはパウロではなくて、エパfrasでした。彼らはエパfrasから福音を学びました。おそらくエパfras自身は、約三年間エペソで働きをしていたパウロの働きを通して福音を最初に耳にして救われたのでしょうか。そして救われた後で、彼は自分の生まれ故郷であった町に戻って、そしてそこで福音を宣べ伝えました。その結果、人々は救いへと導かれて、そこに教会が誕生することになるわけです。だからコロサイの教会の人たちにとって、エパfrasは仲間のひとりでした。いやさらに言うなら、自分たちを教え導いてくれる牧会者でした。羊飼いでした。当然そんなエパfrasに対して、コロサイの人たちは非常に大きな敬意や愛を抱いていたでしょう。そしてそれと同時に、エパfrasも自分の兄弟姉妹たちに対して非常に大きな愛を抱いていました。というのも、この時コロサイの教会は非常に深刻な問題を抱えていましたよね。教会が誕生した後、教会ににせ教師が入ってきました。そして、彼らは正しい福音をねじ曲げようとして働いていたのです。彼らは「救いにおいても、信仰生活においても、キリストだけでは不十分なのです」と訴えて、群の中に間違った教えを広めようとしていました。最初に伝わった福音、それは、

「キリストがすべて」でした。でもそのキリストがすべてだという真理が、「キリスト+これが必要」「キリスト+あれが必要」という、そのような別の何かと取り替えられそうになっていました。当然、信仰者の間には不安や疑念が募っていたでしょう。確かな危険が人々の間に迫っていたのです。

だからこそ、自分の教会を、自分の兄弟姉妹を心から愛していた牧会者エパfrasは、あることをしました。教会が目の前で苦しんでいるその様子を見た彼は、いてもたってもいられなくなりました。そして、彼は、自分がいたコロサイから約二千キロも離れたローマで軟禁されていたパウロを訪ねていったのです。皆さん、二千キロです。長旅で自分の身に危険を招くことになったとしても、エパfrasはパウロを訪ねていきました。そして教会の現状を報告して、必要な助けを求めたのです。私たちが今見ているこのコロサイの手紙は、そんなエパfrasの報告を聞いたパウロが応答として書き記した手紙でした。ですから、少なくともエパfrasはこのような人物でした。彼はコロサイの教会の仲間でした。自分の群れの兄弟姉妹たちのことを思って、彼らの混乱や苦しみ、そういったものに心を痛めた羊飼いでした。自分に与えられたその神の家族を心から愛していたのです。

▶「キリスト・イエスのしもべ」

でも、パウロはそれに加えてもう一つ別の表現を用いていました。12節、ほかに何て付いていますか？「あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、」と。二つ目の表現は、エパfrasは、「キリスト・イエスのしもべ」でした。「しもべ」とは、何ですか？ここで「しもべ」と訳されていることばは「奴隷」とも言い換えることができるものでした。そしてご存じのとおり、この奴隷という存在は、当時、代価を払って主人に買い取られた者たちのことでした。奴隷は自分の好き勝手に生きていくのではありません。買い取った主人の所有物として、文字どおり主人の求めることすべてに忠実に従っていくという責任を負っている者でした。それが「奴隷」という存在だったのです。そしてエパfrasは、だれの奴隷と言われていました？ほかのだれでもない「キリスト・イエスを主人とする奴隷」だったというわけです。エパfrasは自分の主人がだれかをよくわかっていました。だからこそ、自分の主人にいつも忠実であろうとしました。

また何よりも、自分がキリストによって買い取られた者であるということを知っていたからこそ、キリストが愛した教会を、同じように愛そうとしていました。教会のために自分のいのちをささげたその主人に仕えていたからこそ、彼も教会のために自分の身を喜んで犠牲にしてささげようとしていたのです。彼は本当に犠牲を払うことをいといませんでした。改めて考えてみてください。コロサイからローマに行く旅路を思っても、当然それは容易なものではありませんでした。約二千キロの道のりを飛行機や車、電車で行くのではなく、当時は、徒歩や船に乗って行ったのです。当然大きな疲労や大変さを伴うものでした。自分のいのちを落とす危険だって多々ありました。しかし、それでもなお彼はしもべとして、キリストの奴隷として進んで犠牲を払って、そして主と教会に仕えようとしていたのです。それがエパfrasという人物でした。凄いと思いませんか？！この12節に出てきていた「仲間のひとり」「キリスト・イエスのしもべ」という二つのことばだけ見ても、いかにエパfrasという人物が愛にあふれていた存在なのかが、おそらく見えてくるでしょう。間違いなく、彼は神様と教会とのために自分のすべてをささげようとしていた人物でした。自分の思いや自分の権利、自分の楽しみや自分の快適さ、そういったものを求めていたのではありません。エパfrasはまさにキリストと人とを愛し、みずからそれに仕えていった人物だったのです。

そして、ここでちょっと想像してみてください。エパfrasはコロサイの教会を心から愛していました。心から愛していたからこそ、コロサイの教会の中に問題が起こった時に、ローマへとパウロを訪ねて行ったのです。コロサイの手紙が書かれたこの時、エパfrasはパウロと一緒にいました。愛する兄弟姉妹たちと離れ離れになっていたのです。物理的に、自分が心から愛しているその人たちと一緒にいる事はできませんでした。その状況の中で、いったいエパfrasは何をしていたと思います？その答

えが12節に記されていました。もう一度よく見てみると12節の続きにこう書いています。「…彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。」と。エパfrasは教会のために、祈りに励んでいました。時々って書いていました？「いつも」と書いていました。どんな時であろうと、エパfrasは愛する兄弟姉妹たちのことを覚えて祈っていました。彼らのことを忘れる事はなかったというわけです。

▶「励んでいます」

また特にここでパウロは、エパfrasは「祈りに励んでいます」と書いていました。「励んでいます」というと少し軽く聞こえるかもしれませんが、この「励む」ということばは、もともと「苦しむ」とか「もどえる」「格闘する」「苦闘する」といった意味が含まれています。そしてここから、例えば賞を勝ち取るために必死になって努力をしているアスリートの姿であったり、戦いの中で苦闘している兵士の姿、そういったものを表すのに用いられたりもしました。これと同じことばは、別の聖書箇所でもこんなふうに使われています。Iコリント9：25にこう書いています。「また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。」この「闘技をする者」、これが、「励んでい」と同じことばでした。またこれと同じことばの名詞形は、ゲッセマネの丘でイエス様が祈りをささげていた、あの姿を描くのにも用いられていたことばでもありました。ルカ22：44にはこんなふうに使っていますね。「イエスは、苦しみもだえて、いよいよ切に祈られた。汗が血のしずくのように地に落ちた。」この「苦しみもだえて」ということばが、さっき私たちが見た「励む」ということばと同じものでした。

そうすると、どうです？この時エパfrasが祈っていた様子を思い浮かべることができますか？いったいどんなふうには祈っていたのでしょうか。離れ離れになっている時にあって、エパfrasはコロサイの人々のことを、何となく気が向いたときにだけ祈っていたのではありません。彼はどんな時も、彼らのことを熱心に、懸命に覚えていました。自分の何かをするよりも、彼は昼も夜も愛する者たちのために、祈りに格闘していたというわけです。祈りの中で苦しんでいたということです。私たちは時に、祈るということ自体に難しさを覚えることがあります。エパfrasはほかの人たちのための祈りに、苦闘していたのです。懸命になって祈っていました。離れ離れになっている中で、決して彼らのことを忘れずに、ずっと心に留めながら、昼も夜も一日中いろんなことを彼らのために祈っていました。

でもそんなにも懸命になって、いったい彼は何を祈っていたのでしょうか？その内容についても12節に明白に書いていましたね。「彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。」二つの内容が出てきました。

一つ目は最初に書いていました。コロサイの信仰者たちのために、「あなたがたが完全な人となり」と。コロサイの信仰者たちがより完全な人となること、そのためエパfrasは祈っていたのです。ここで「完全な」と出てきました。これは何も信仰者が罪のない完璧な者になるように、ということ祈っていたのではありません。残念ながら、私たちはこの地上において完璧になる事はありません。この「完全な」ということばは、もともと「成長する」とか「成熟する」といったふうに訳すこともできました。そうすると皆さん、わかりますよね。「あなたがたが成長した者となり」「あなたがたが成熟した者となり」と祈っていました。信仰者たちがそのままいるのではなくて、ますます霊的に成熟した者となっていくということ、何よりもイエス・キリストに似た者へと成長していくということ、そのことを祈っていたのです。もちろん彼は自分のためにも祈っていたでしょう。でもそのことを、兄弟姉妹のために心から祈っていたというわけです。

それに加えてもう一つありました。その続きに書いていました。何を祈っていたか？「また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう」と。コロサイの信仰者が「神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができる」そのために祈っていたのです。コロサイの兄弟姉妹たちがしっかりとそ

の場に立ってられるように、と祈っていました。改めてコロサイの教会を取り巻いていた環境や状況を思い返してみると、よくわかりませんか？彼らはどんな目に遭っていました？コロサイの教会はこの時、さまざまな間違っただけによって悩まされていたのです。にせ宣教師たちの誤った教えが吹き荒れていました。混乱や不安が内側に嵐のように起こっていたのです。そんな中であって、彼らの足元はぐらぐらと揺らいでいました。だからエパfrasは、彼らがみことばを知って、そして神のみこころに確信を置いて、そこにしっかりと立ち続けることができるようにと繰り返し祈っていたというわけです。想像できません？遠く離れてしまったその愛する彼らが非常に大きな危険に遭っていることをわかっていたエパfrasは、兄弟姉妹たちが間違っただけに流されてしまうことがないように、彼らが自分のいない間も真理のうちに堅く根ざし続けられるように、必死になって祈っていたのです。神様に祈り求めているのです。

そこまで教会のことを心配に思うのなら、早く帰ればよかったんじゃないの、と思う人もいるかもしれませんが。でも残念ながらそうはいきませんでした。ピレモンへの手紙は、このコロサイの手紙が記されたのと同時期に書かれた物として考えられているのですが、そのピレモン23節にエパfrasの状況が書いてありました。「キリスト・イエスにあって私とともに囚人となっているエパfrasが、あなたによろしくと言っています。」文字どおりエパfrasがパウロと一緒に囚人となって軟禁されていたのかどうかはわかりません。でも確実に言えるのは、エパfrasは帰りたくても帰れませんでした。その時エパfrasは、パウロとともにいなければいけなかったのです。愛する者のもとに戻りたくても戻れない、その葛藤を覚える中で、エパfrasは何をしたか？何よりも主を愛し、人を愛していたその羊飼いは、群れの苦しみを自分のこととして覚えて、そして彼らのために祈りに葛藤していたというわけです。

そして皆さん、おもしろいのは、エパfras自身がそのことを語っていたのではありません。エパfrasの様子を間近で見っていた人がいました。だれだと思えます？もちろんそれは、パウロでした。同じところで軟禁されていたとすれば、すぐ横にいるエパfrasが何をしているのかを、パウロはずっと見ていたのです。そしてそのパウロがこんなことを言いました。12節の続きの13節を見るとこう書いていました。「私はあかしします。彼はあなたがたのために、またラオデキヤとヒエラポリスにいる人々のために、非常に苦勞しています。」と。パウロはあかししていました。想像できません？もしコロサイの人たちの中に、エパfrasが自分たちのことを忘れてしまったのではないかと不安を抱くような人がいるなら、パウロは言ったのです。「私はあかししますよ」と。「エパfrasは私の横で、ひたすらにずっとあなたたちのことを覚えて祈っています。」と。しかも最後に「非常に苦勞しています。」と言われていました。この「苦勞しています」ということばにも「苦惱」とか「苦痛」とか「骨の折れる仕事」といった意味が含まれていました。ですから、パウロが何度も言わんとしたことは明白でした。エパfrasは確かにコロサイの教会のために骨を折って苦しみ、苦惱の中で祈り続けていたということです。

でも凄いのはそれだけではありません。コロサイの教会のために心から祈っていたエパfrasは、13節に書いているように、同時にその近くにあった町、ラオデキヤやヒエラポリスの人たちのためにも同じように祈っていたということです。そのような者たちのためにも彼は苦勞していました。祈りに格闘していたということです。そうすると見えてきませんか？エパfrasが持っていた教会に対する愛というのは、とどまることを知りませんでした。コロサイの教会の人たちだけではありません。ラオデキヤにいる人に対しても、ヒエラポリスにいる人たちに対しても、彼らを愛したゆえに、彼は祈る者として格闘し続けていたというわけです。

では少し自分のこととして考えてみてください。キリスト・イエスの奴隷として歩んでいたエパfrasは、まさに神様と人のために犠牲を払って仕えていた存在でした。私たちひとりひとりも、イエス・キリストによって罪を赦され、救われ、代価を払って買い取られたのなら、私たちも今キリストの奴隷として生きています。そうであるなら、果たして私たちは彼が持っていたと同じような愛を持って、今

歩んでいるでしょうか？代価を払って買い取ってくださったそのキリストを愛しているからこそ、みずから犠牲を払って愛を示してくださったその方を愛しているからこそ、その方、主を愛するだけではありません。その方が愛した教会のことも、私たちは心から愛しているのでしょうか？そしてそれに加えて、私たちが愛を持っていると言うなら、では、私たちはお互いのためにどのように祈っているのでしょうか？考えてみたときに、私たちは最後にいつ、ほかの兄弟姉妹がみことばにあって変えられて、そして成長するようにと祈りに励んだでしょうか？ほかの兄弟姉妹の成長を思って、私たちは最後にいつ祈りに格闘したでしょうか？そもそも私たちは祈りに格闘したことなどあるのでしょうか？それぞれの歩みに私たちが心を配って、私たちは最後にいつ愛を持って祈ったでしょうか？私たちにも互いが必要です。そして、思いませんか？この手紙を読んだコロサイの兄弟姉妹たちはどんなに励まされたでしょう。エパfrasは自分たちのもとにいませんでした。でもその自分たちを愛してくれるその牧者がずっと私たちのことを覚えて祈ってくれていると。それがコロサイの兄弟姉妹にとって大きな励ましになったでしょう。そして同じように皆さん、だれかが自分のために祈ってくれているということを知っていれば、それは大きな励ましになります。私たちも互いに祈り合うことが必要だということです。祈りに格闘することが大切だということです。神様を愛し、パウロに仕え、そして教会の成長のために祈りと格闘していた人物、それこそが6人目の同労者、エパfrasでした。

7. ルカ 14 a 節

続けて7人目の同労者の姿を考えてみましょう。7人目は、ルカでした。14節の頭にこんなふうに記されています。「愛する医者ルカ」と簡潔に書いていました。そのようにルカという人物はパウロにとって愛する友であり、また何より彼のことを支えていた医者でした。改めて考えてみても、パウロにはいつも自分の健康面を世話してくれる存在が必要だったと思いませんか？多くの方がご存じのとおり、彼の働きはいつも困難や痛みと隣り合わせでした。例えば彼は、自分自身が味わった苦しみの一部をこんなふうに書いています。Ⅱコリント11：23－27節にこうあります。「：23…私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。：24 ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、：25 むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。：26 幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、：27 労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。」これをどう思います？確実に、この時パウロのからだはすでにボロボロだったでしょう。でも驚くべきなのは、このⅡコリントの手紙が記されたのは、彼が実際に殉教する約十年も前の事だったということです。つまり今私たちが見たいいくつかのリストがありました。ここで挙げられているよりもさらに多くのひどい苦しみを彼はこの後もずっと受け続けていたというわけです。そして同時に彼は生涯、慢性的な病にも悩まされていました。ですから、間違いなくパウロが主の働きを最後まで成し遂げるためには、彼のからだをケアしてくれる医者が必要不可欠でした。そしてその働きを忠実に担っていたのが、ルカだったというわけです。ふたりが最初どのようにして出会ったのかはわかりません。でも、ルカは少なくとも第二次宣教旅行の時からパウロに同行を始め、そしてその後も彼のもとを離れる事はなかったと言われています。パウロが最後に記した手紙の中でもこのように述べていました。Ⅱテモテ4：11にこうあります。「ルカだけは私とともにおります。…」ですからパウロにとってルカは、いつも隣にいてくれて、自分のことを霊的な面だけではなく、物質的な身体的な面においても支えてくれる、まさに愛する医師だったのです。

そして皆さん、これに加えてルカは、いろいろな知識に精通していた賢い人でもありました。実際このルカという人物こそ、新約聖書全体の四分の一を占めることになるルカの福音書と使徒の働きの二つの書物を記した著者でもあったのです。皆さんはおそらくルカの福音書と使徒の働きの両方をすでに何回

も読んだことがあるかと思いますが、読んでいれば気づきますよね。ルカはこの二つの書物を通して、バプテスマのヨハネの誕生から、イエス様の十字架と復活、そしてまたペンテコステの教会の誕生から、全世界へと広まっていく教会の成長に至るまで、ほかのどの書物にも見られないような事細かな歴史を正確に記していました。要するに彼は医学にのみ長けていたのではないということです。彼は当時のことばや地理や文化、さまざまな社会情勢に至るまで、よくいろんなことを理解していました。ルカは非常に聡明で賢い人物だったのです。医学にも精通していて、いろんな知識も持っていた彼は、その知識や能力を自分のために用いることだってできたでしょう。医者として自分の地位や名声を追い求めることだってできたでしょう。でもルカは何していたか？そういったすべてのことを喜んで犠牲にしました。パウロとともに働きをなしていくことを選択することによって、多くの苦痛を味わうことになったとしても、いろんなものを失ったとしても、彼はそれでも最後まで愛する友のことを支えて、みずからを主のためにささげ続けていたわけです。それが、ルカという人物でした。

ここで一度立ち止まって考えてみてください。このように聞いてきて、私たちはルカから何を学べるのでしょうか。一つ言える事は、私たちの多くは今ルカと同じような医者ではないでしょう。彼と同じように医学や語学などそういったものに精通しているというわけでもないかもしれません。でも同時に、皆さんもこれまでいろんなことを学んだり、教えられたり、訓練されたりしてきました。何らかの仕事や働きを皆さん自身もなされてきたでしょう。それは教師として何かを教える分野かもしれませんし、ビジネスマンとしてもものやお金を扱う分野かもしれません。音楽などの芸術を学んできた人たちもいるでしょうし、パソコンなどの機械を扱うことを訓練されてきた人たちだっているでしょう。挙げればきりはありません。皆それぞれに小さい頃から今に至るまで、私たちは多くの知識や技術、そういったものを、この世にあってさまざまな場面で学んできたのです。私たちが持っているものはみな違います。そういったものを私たちは主のために用いることができるということです。例えば私のように、みながみな講壇から語るのではありません。でもそうやって皆さんが学んだり訓練してきたことを、すべて主のために使うことができるのです。そうだとすると、どうでしょう？私たちは自分がこれまでに考えてきたことや学んできたことを、すべて主の働きのために喜んで役立てようと祈っているのでしょうか？キリストの福音を宣べ伝えるために、これまでに神様が学ばせてくださったことをどのようにして使って、神様のために働きをなせるだろうと、その機会を追い求めているのでしょうか？パウロは別にルカに医学を教えたわけではありません。ルカは自分でそれを学びました。そして学んだその医学を用いて、神様とパウロに、教会に仕えていたのです。さまざまな苦しみを経験したとしても、彼は主の働きのために持っているものすべてをささげて、犠牲を払うことを己の喜びとしていました。そんなルカの働き、それはパウロにとって欠かせないものとなったわけです。果たして私たち自身は、どんな犠牲を払って、自分に与えられているどんなものを神様のために、教会のためにささげたいとして今歩んでいるのでしょうか？

かつて二十世紀のイギリスで活躍したマーティン・ロイドジョーンズという先生がいました。ご存じの方もあるでしょう。彼も若いときには医師として働いて、そして非常に大きな成功を収めていたような者でもありました。でもそんな彼も、主によって救われ、大きく変えられることになります。そして医師としての地位や名声をすべて捨て去って、牧師となりました。周りの者たちは当然、その決断に驚きました。なぜ、わざわざ約束されていた成功や富をみずから諦めるのだろうか、と疑問を抱きました。そしてある時彼は、どうしてそんなにも多くの犠牲を払ったのですかと問われます。その質問に対して、こう応えていたのです。「私は何も捨ててはいません。全てを受けたのです。福音の宣教師として召されることは、神が人に与えることのできる最高の栄誉だと私は考えるのです。」（マーティン・ロイドジョーンズ）ルカも同じだったでしょう。パウロと一緒に歩めば、自分が手にすることのできるものもすべて失うことになったでしょう。でもそういった大きな葛藤や苦しみが待っていても、それでもな

お彼は、自分の成功や名声よりも愛するパウロのために、いや何より神様のために喜んで犠牲を払って仕えようとしたのです。それが7人目の同労者、ルカでした。

8. デマス 14b節

そして最後に皆さん、もうひとりです。8人目の同労者ですが、それは、デマスでした。14節の続きにこう記されています。「…それにデマスが、あなたがたによろしくと書いています。」ここまで私たちは、7人の忠実ですばらしい信仰者たちの姿を学んできました。でも残念ながら、このデマスだけは違っていました。彼は唯一パウロにとって不忠実な者となった、そんな悲しい人物だったのです。このデマスも確かにはじめはほかの同労者とともに歩んでいました。一見すばらしい兄弟のひとりのようにも思えました。実際、ピレモンの中にもこんなふうに記されています。さっき見た同じピレモンの続きの24節にこう書いています。「私の同労者たちであるマルコ、アリストアルコ、デマス、ルカからもよろしくと書いています。」と。これ、すごいと思いませんか？今まで私たち学んできた名前が挙がってきていますね。このときのパウロにとってデマスという存在は、マルコやアリストアルコやルカと同じような信頼できる同労者に思えた、そんな存在だったというわけです。でも実際は、それとは大きく異なっていました。どうしてですか？何があったのですか？コロサイの手紙が記されてからほんの数年後に書かれたⅡテモテの中にこんなことばが記されていました。死を目前に控えたパウロがこんなことばを手紙の終わりのところで口にしていたのです。Ⅱテモテ4：10「デマスは今の世を愛し、私を捨ててテサロニケに行ってしまう、…」と。ここで用いられていた「私を捨てて」というこの「捨てて」ということばには、「見捨てる」とか「捨て去る」といった意味が含まれています。またこのことばは、単に見捨てるというだけではなく、特に「厳しい状況の中で打ちのめされ、どうすることもできなくなっているような者を見捨てること」を表したりもしました。よく考えてみてください。パウロはこの時どんな状況にいました？パウロは自分のいのちがいつ取られてもおかしくないような状況の中にいました。彼はこの時、助けを最も必要としていた存在でした。自分のそばでいつも自分のことを励ましてくれる、そんな友を何よりも求めていたのです。それが彼にとって一番欲しかったでしょう。しかしそんな状況の中であって、デマスはパウロを見捨てたというわけです。デマスはパウロよりもこの世を愛しました。パウロとともに苦しみ続けることよりも、自分の楽しみや快樂、快適さを選びました。犠牲を払って仕えていくことを拒んで、彼はパウロのもとを去ったのです。パウロにとって、これはどんなに辛かったでしょう。時間をずっとともにしてきた信頼していた友に裏切られた彼は、どんなに悲しかったことでしょう。

でも忘れてはならないのは、このデマスは、一見本物の信仰者に思える人物だったということです。おそらく最初にキリストや福音を耳にしたときには、大いに喜んでいたのでしょう。パウロに対しても、はじめは進んで仕えて、いろんな働きも一生懸命に行っていたのでしょう。だから皆さん、あのパウロも途中までは気づかなかったのです。でも次第に彼の心は神様から離れていきました。みことばや働きへの熱意を失っていきました。パウロが愛していたものを同じように愛することをしなくなっていきました。その心は次第にかたくなになっていったのです。その心が本当には救われていなかったからこそ、本当には変えられていなかったからこそ、かたくなになった彼は信仰を捨てた、というわけです。デマスはそんな悲しい人物でした。見せかけだけはすばらしい兄弟に思えたにもかかわらず、キリストをみずから捨て、パウロを裏切って大きな痛みと傷を負わせた者だったのです。

立ち止まって改めて自分自身のこととしてよく考えてみてください。デマスは、見せかけやふるまいはすばらしい信仰者に見えました。でも、彼の心の内に、神様に対する、キリストに対する愛はありませんでした。果たして今私たちは、本当にキリストを心から愛しているのでしょうか？自分の救い主、主としてキリストを信じ受け入れて、心からこの方のことを愛し、この方のためにどんな犠牲を払ったとしても、すべてをささげたとしても歩んでいこうとしているのでしょうか？デマスにはそれができません

でした。そしてその結果は悲惨なものでした。覚えていないといけないのは、私たちはみな、いつか必ず主にお会いする日がやって来るということです。そしてもし私たちが、自分は救われていると思い込んでいただけだとしたら、その最後はことばでは言い表すことができないほど悲劇でしかありません。イエス様もはっきりとこう言われていました。マタイ7：21-23にこう記されています。「：21 わたしに向かって、『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。22 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行ったではありませんか。』23 しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」と。「よくやった忠実なしもべ」と言われることを期待して、疑うこともなく主の前に立つ時、「わたしはあなたのことを全然知らない。わたしから離れて行け。」ということばを聞くなら、どうでしょう？どれだけそこで嘆いたとしても、もう私たちには手遅れなのです。だからこそ愛する皆さん、私たちは今、自分自身の心をよく吟味しなければいけません。本当にキリストを愛しているのでしょうか？それとも、キリストよりも、この世の何かを今愛してはいないのでしょうか？もちろん、救われている者も罪との葛藤を日々経験します。難しささえ覚えます。でも同時に、罪を犯したのであれば、その罪から離れたいという思いが心の中に増し加わっているのでしょうか？神様の忌みきらうその罪を同じように忌みきらって、神様が愛されているものをますます愛する者として変えられ続けているのでしょうか？もしこの中に、まだ自分自身の罪を本当に神様の前で認めておらず、主に逆らって歩み続けている人がいるなら、どうかその罪を悔い改めて、きょう神様の前に赦しを求めてください。主の前に立った時では遅いです。今ならまだ恵みとあわれみがあります。ただ恵みによって、あなたにも救いを与えることのできるそのまことの救い主を信じ受け入れて、そしてこの方のために自分のすべてをささげて生きてください。このキリストにこそ、私たちにとって唯一必要な救いがあります。このキリストのうちにこそ、私たちにとってほかの何にも比べることもできない希望があります。ですからこの方をどうかきょう知って帰ってください。はじまりはすばらしい者のように思えました。しかし、今の世に心奪われて、罪を愛し、パウロを捨てた不誠実な人物、それが8人目のデマスでした。

さて皆さん、こうして私たちは全部で8人の同労者を見してきました。何度も言いますが、パウロもたったひとりで働きをなしていたわけではありません。はじめにも言いましたが、彼にも重荷を分かち合うことのできる友がいました。祈り支え合うことのできる神の家族がいました。同じように主を心から愛する、そんな忠実な同労者たちがいたのです。残念ながらひとりパウロを裏切って去っていくことにはなりました。でも残りの者は、大きな働きをなし続けようとするパウロにとって欠かせない存在となったわけです。見てきて思いませんでした？本当にいろんな兄弟を神様は用いておられました。ある者はパウロを一度傷つけました。でも成長し、パウロの役に立つ者となりました。ある者はパウロの必要だとあれば、どんなところであろうと、どんな犠牲を払ってもついていこうとした者でした。ある者は医学の知識を持っていて、パウロを支えた者でありました。そのように普通に思える信仰者たちがパウロを力強め、励ましていたのです。今の私たちにとっても、励ましは欠かせません。私たちは互いを励まし合い続けることができます。どのようにしてか？まず一つ私たちができること、それはきょうまで見てきたように、すばらしい信仰者の模範に倣って、私たちも神様と人とを愛する者としてますます成長し続けていくことです。犠牲を払うことを喜んで主に仕え、そして互いに仕え合う者として今週もともに歩んでいきましょう。